



Cuttin' It 2

「イギリスの空は、そんなに暖かくない! ソマリアはそれでいいけど。」と演出家に言われ、晴れの日バックライトをL206からOW、L203、最後に、L202に行き着き、Cuttin' It Productionは、今住んでいるイギリスの明かりについて、自分に再認識させることが多々ありました。

この公演での一番の挑戦は、真っ白の衣装を着た黒人の役者の顔を、どのように引き立たせるか。フロントから当てても、どうしても衣装の白に明かりが反射して、うまく役者の表情が引き立たない。顔に暖かいトーンを当てようとする、衣装の白が暖かくなりすぎてしまう。彼らの顔を常に狙う、フォロースポットが欲しいくらいだと思いつつ、そんなお金もテクニシャンもいないので、ほかの方法を考えました。

キャパ150人という、狭いスタジオ劇場内でムービングを使うのは、ちょっとうるさすぎるかなとは思いつつ、一番お手頃なLV1000 Tungstenを1台だけ仕入れてもらっていたので、これをポイントポイントで顔に命中させてみました。顔の明るさは大分改善されたけれど、ムービングの動くときのノイズという副作用に悩まされました。そこで、マークキューを何回かに分けて動かしてもらい、なんとか音響に紛れて聞こえないくらいまで、抑えることができました。

試行錯誤の末、SSを彼らの顔の高さまで上げて、良い感じに彼らの表情が引き立つようになりました。照明家アナ・ワットソンから学んだ、SSのアイボール打ち(SSの置く位置を普通よりもお客さん側に移動し、少し舞台奥打ちにすることによって、役者の目玉にSSの灯りが反射するように打つSS)は、効果的でした。

幸い役者2人ともが、ほとんど同じ肌の色トーンの黒人の方たちだったので、彼らがすれ違うたびに、光量をこまめに変える必要はそこまでありませんでした。もしこれが、黒人と白人の二人三脚の演目だったら、2人のバラ

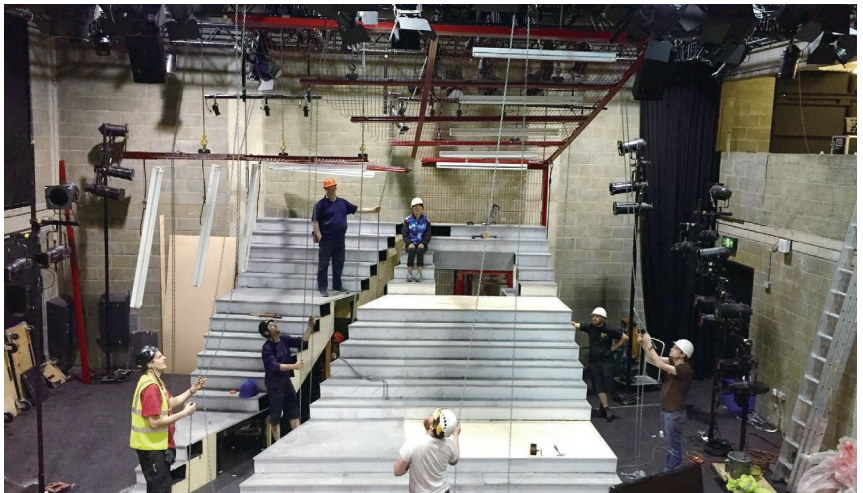
ンスをとるのに、とても苦労していたことでしょう。

その他に苦戦したのが、ディーマーが効く蛍光灯でした。役者たちが動くたびに、天井の蛍光灯の明かりも、彼らの真上を照らすということも照明でやろうとしました。15%以上にすると明るすぎて、役者の顔に集中できない。かといって12%まで落とすと、0%からフェードインしたとき、ちゃんと点灯しない。そこで、蛍光灯が点灯する初めのキューの蛍光灯の光量を30%にセットして、10割まで上がって4割まで下がるカーブを作り、そのキューとチャンネルに適用しました。これはなかなかいい具合にアクセントになりました。

最大の難関だったのは、セットのコンクリート(に見せた)階段の下に隠された、沢山の女の子の靴を、クライマックスまで見せないように照明を作り、最後にビックリ箱を開けたように、それが現れるというシアターマジックを成し遂げることでした。セットデザイナー、ジョアナ・スコッチャーと私

は、プロダクションの早い段階で、階段のサンプルを作り、照明の実験をしました。ゴーズを使うか、透明の特殊ガラスに電流を流して曇らせる技術を使うか(これは高額すぎて、手が出ませんでした)、階段の下にスモークをたいて、靴を隠すかなど、いろいろ案が出ました。結局、透明のパースペックスの板を何レイヤーもスプレーして、試行錯誤が何日も繰り返されました。ようやく前明かりを当てても靴が見えず、パースペックスの後ろから靴を照らすと、靴が浮き上がって見える、LED tape lightの当て角度と、絶妙なペイントのレイヤーの厚さまで行き着くことができました。

今までずっと、照明デザインは孤独な仕事だと思っていましたが、今回この公演に関わらせていただいて、(今更ですが)初めて本当のコラボレーションの喜びを感じたように思います。どんな苦しい状況下でも、根気強くひたすらサポートをしてくださった照明チーフのコスタ・カンパナキさんに感謝感激の気持ちでいっぱいです。



ヤングビック劇場にての仕込み



SSのレベル微調整と弱めの前明かり



クライマックス「女の子は、次の世代も、次の次の世代も(犠牲になる)」の台詞で現れる靴